



ゆっくりと、確かに育つもの

校長 土屋 智樹

朝の空気が頬に冷たく感じられる季節ですが、1年生の子どもたちは寒さに負けず、登校すると真っ先にチューリップの水やりに向かいます。12月に植えた球根から、1月末に小さな芽が土の中から顔を出し始めている植木鉢が、少しずつ見られます。花が咲くのはまだ先ですが、春に向けた準備が静かに進んでいるのだと感じさせてくれます。季節の変化とは、劇的な瞬間に訪れるものではなく、「気づけば確かに変わっていた」と思えるような、ゆっくりとした歩みの積み重ねで訪れるものです。

子どもたちの成長の速度も、季節の変化と同じようなリズムを持っているのかもしれませんが。勉強の成果や運動能力の向上といった“目に見える変化”は分かりやすいものですが、むしろ日常の中に隠れている“見えにくい変化”にこそ、子どもたちの大切な成長が宿っていると感じます。例えば、友達の困りごとに気づいて声をかけるようになったこと、分からないことに対して粘り強く取り組めるようになったこと。先生方と面談をした際に語ってくださった子どもたちの姿には、そうした日々の小さな変化が数多く見られました。それらは劇的ではありませんが、確かな力として時間をかけて育まれてきたものばかりです。

ここで、ある雑誌を読んで出会った「楽しむ実践が『偶然の出会い』を生む」という言葉を思い起こしました。そこでは、「セレンディピティ」という概念を例に、ただ努力するだけでなく、楽しみながら続けることで思いがけない発見や出会いが生まれると紹介されていました。セレンディピティとは、偶然の中に価値あるものを見出す能力、あるいは偶然の発見を表す言葉だそうです。日本のことわざ「棚からぼたもち」と似ているようにも聞こえますが、セレンディピティにおいては、努力をせずに幸運が降ってくるわけではありません。自分が取り組むべきものについて考え続け、悩んだからこそ訪れる偶然だと言われています。そして、真面目に努力すれば必ず起こるのではなく、思いがけない瞬間にふとやってくるものでもあります。努力を続けることはもちろん大切ですが、いつも張りつめた状態ではなく、楽しみながら続けていくことが鍵になるというのです。

「ゆっくり変わるもの」と「偶然の出会い」。この2つは一見全く別の言葉のように思えますが、実はよく似ているのではないのでしょうか。どちらも急かすことのできないものであり、子どもたちの成長を支える大切な要素でも感じます。努力を積み重ねる時間と、楽しんで心が自由になる時間。その両方がそろって初めて、小さな変化が芽を出し、やがて目に見える姿へと育っていくのでしょう。

春へ向かってゆっくりと動き出す2月。子どもたち一人ひとりの心の中でも、言葉にならない変化が少しずつ育まれているはず。日々の学びの中で生まれる思いがけない出会いや気づきが、次の学年への大きな一歩につながっていきます。そんな時期の中に私たちはいます。今月も、子どもたちの小さな変化と偶然の出会いに、そっと耳をすませながら見守っていきたいと思います。